



タイトル ドイツリスク  
「夢見る政治」が引き起こす混乱

著者 みよしのりひで  
三好 範英

出版社 光文社

発売日 2015年8月31日

ページ数 244頁

戦後のヨーロッパ・システムは限界にきている。イスラム過激派によるフランス・パリの政治週刊誌「シャルリー・エブド」襲撃事件、ウクライナ東部でのウクライナ軍と親ロシア派武装集団間の戦闘激化、ギリシャ債務問題など、いずれも世界を揺るがす大事件である。そして、その間隙を縫うように、ヨーロッパ各国の右派ポピュリズム政治勢力の台頭や、地中海を経由しての難民大量流入のニュースが伝えられる。

ユーロは、統合を進めるどころか、ヨーロッパの分裂に力を貸している。若年層移民の高失業率はテロの土壌となり、それが移民排斥感情を煽って、いわゆる右派ポピュリズムの台頭を招いている。ウクライナ危機は、戦後ヨーロッパが培ってきた平和的手段による紛争解決プロセスや、ロシアをヨーロッパに包摂するというビジョンを危機に陥れた。地中海から押し寄せてくる多くの難民を、寛容の精神だけで扱うのは最早不可能である。

ユーロ危機を招いたギリシャ支援における頑なな姿勢、ロシアや中国への接近と米国離れ、学者やメディアの誤解に基づく日本批判、EUのリーダーであり、GDP世界第4位の大国が、世界にとって、そして日本にとって、最大のリスクになりつつある。ドイツは変質したのか？ それとも、ドイツに内在していた何かが噴出したのか？

さて、目次を覗いておこう。

はじめに 危うい大国ドイツ—夢見る政治が引き起こす混乱

## 第1章 偏向したフクシマ原発事故報道

- 1 グロテスクだったドイツメディア
- 2 高まる日本社会への批判

- 3 原発を倫理問題として扱うドイツ

## 第2章 隘路に陥ったエネルギー転換

- 1 原発推進を掲げる政治勢力は存在しない
- 2 急速な自然エネルギーの普及
- 3 不安定化する電力需給システム
- 4 ドイツ人ならやり遂げる、という幻想

## 第3章 ユーロがパンドラの箱をあけた

- 1 それはギリシャから始まった
- 2 「戦後ドイツ」へのルサンチマン
- 3 夢を諦めない人々
- 4 綱渡りを強いられるメルケル
- 5 「夢見るドイツ」がユーロを生み出した

## 第4章 「プーチン理解者」の登場

- 1 緊密化する対ロシア関係
- 2 「東への夢」の対象としてのロシア、中国

## 第5章 中国に共鳴するドイツの歴史観

- 1 歴史問題での攻勢
- 2 歴史問題がなぜ中国に傾くのか

おわりに ロマン主義思想の投げかける長い影

長年ドイツで取材活動を行ってきた著者は、本誌副題の「夢見る人」というドイツとドイツ人に対する定義が、この問題を解く鍵になるという。

著者が言う「夢見る人」とは、「現実を醒めた謙虚な目で見ようとするよりも、自分の抱いている先入観や尺度を対象に読み込み、目的や夢を先行させ、さらには自然や非合理的ものに過度の憧憬を抱くドイツ的思考のあり方」だという。

2011年3月11日の福島第一原発事故のとき、関東の広域で空間線量が上昇した15日には、ドイツ人特派員はほぼ全員が東京を離れ、大阪、あるいはソウルまで避難したという。

ドイツのマスコミはヒステリー症状に陥っていた。花粉症でマスクをかけて車で信号待ちのサラリーマンの写真を「原発事故に怯え、東京から逃げ出す人々」と、信じられないニュースを流していた。事実認識のお粗末さや、偏見に無自覚な報道の例である。

それだけでなく、歴史認識では、中韓とほぼ同一線上の批判の目をドイツマスコミは日本に向ける。

エネルギー転換、ユーロ危機、ロシア・中国という二つの東方世界への接近 — この三つのテーマから、ドイツの危うさの正体を突き止め、根強い「ドイツ見習え論」に警鐘を鳴らす。

外国メディアの報道は多かれ少なかれ、同様だったが、英国 BBC テレビの落ち着いた、多角的な報道が印象に残ったと著者はいう。ドイツと英国の報道の間で、事故の実態、被害拡大の見通し、政府の対応や情報公開への評価の違いは驚くほど鮮明だったという。

脱原発にエネルギー・システム改革の夢を抱き、ユーロにヨーロッパの永続平和の夢を託し、そして東方の非啓蒙主義的世界にこそドイツ本来の精神的故郷があるように感じる、そんなドイツの姿である。

エネルギー転換。ドイツは「現実より、理想を優先する」傾向にある。その典型が福島第一原発事故を受けて、2020年までの全原発廃止を法案化した「エネルギー転換」である。しかし、固定価格買い取り制度を利用し、風力や太陽光の発電所建設が進んだ結果、電気料金は2倍強に高騰し、送電線建設の遅れなどで、「脱原発」実現に疑念が広がり、著者によると「転換は無謀な賭けと結論づけられるかも知れない」という。

ユーロ危機。メルケル首相は、いま難民から絶賛されている。ナチスの蛮行への反省から人道主義の観点で受け入れを表明したためだが、「難民の基本的権利には上限がない」との発言が、大量移入に拍車をかけたとの非難も根強い。宗教や文化の衝突や IS (イスラム国) などのテロリストが紛れ込む危険性への処方箋を示していない。

欧州で第二次大戦以来 最も深刻な危機とされる混乱の一端が過剰な人道主義にあるとすれば、「夢見る」理念先行のドイツが世界のリスクにならないことを祈るばかりである。

ロシア・中国という東方世界への接近。南京事件や慰安婦問題で中国の主張を鵜呑みにし、安倍首相を「歴史修正主義者」と決めつける。その背景には、ロシア、中国との結びつきを深めようとする動きがある。歴史的にドイツはユーラシア大陸の東方にロマンを求めてきた。

ただ、緊密化が経済からだけでないところが厄介である。近年、ドイツの貿易相手国は日本を抜いて中国となった。メルケル首相のトップセールスもあり、フォルクスワーゲンの世界販売量は970万台。このうち327万台(34%)が中国市場である。さらにこのドイツの反日を中国が便乗して利用している

独露、独中の接近が、大陸国家同士の国民性によるとすると、日本の政治上、安全保障上の脅威になりかねない。

はたして、ドイツは多くの日本人が親近感を持って理想視するに値する国なのか、筆者の問題提起には説得力がある。

さて、本書を読めばドイツの反日を中国が便乗して利用していることがよく分かる。

本書で最も重要な指摘を挙げておこう。第二次大戦後ナチス・ドイツによる蛮行に対する国際社会の厳しい非難はドイツ知識人を苦しめた。その心理的補償を得るには、「過去の克服」を徹底してそれを誇る、といった屈折した形を取った面がある。

すなわち、ドイツ語に「罪を誇る」という言葉があるが、戦争に伴うすべてをドイツの責任として受け入れて謝罪することを続けるうちに、ドイツ人は、逆説的だが、過去の克服に関して、倫理的な高みを獲得したと信じ込むようになった。いわば、「贖罪のイデオロギー化」が起こったのである。

そこに、日本が過去の正当化に拘泥することを倫理的に批判する、少なくとも主観的に優越性が生まれる。ドイツ人に対し、ドイツの過去克服の歩みが世界の模範であり、日本は邪悪である、と繰り返し語りかけることは、屈折した優越感をくすぐる働きをする。

そこには、ナチズムの過去を糾弾され続けてきたドイツ人が、「道徳的に自分より劣った日本人」を発見して、バランスを回復する精神のメカニズムがあるのではないか。それは、素直にナショナルな感情を表出することをタブー視されてきたドイツ人がたどり着いた、屈折したナショナリズムの表現なのかも知れないと著者は分析する。

ドイツは謝罪して過去に訣別しようとしているが、日本は謝罪していないなどと中国のプロパガンダを鵜呑みにして（あるいは信じ込むことによって）主観的な優越感に浸っているわけである。真実は、日本が謝罪しなければ「謝罪しろ！」と批判され、謝罪したら、「謝罪が足りない！」と批判され、何回謝罪しても、「日本は一度も謝罪していない」と言われる。つまり、中国は世界に向けて「日本は一度も謝罪していない」と喧伝するわけである。ドイツはそれをうまく利用することによって優越感に浸れるというわけである。



ジャーナリストの木佐義男氏（中央口論 2015.7）『「歴史認識をドイツに倣え」という愚』によれば、「戦争責任で日独は何が違ったのか」で以下のように述べている。

なぜ、ドイツは「過去を克服し清算した」と言われ、日本は「していない」とされるのだろうか。一番大きな要因は、周辺国の違いだという。メルケルはそのことを講演で強調したが、先入観を持って聞いているとピンとこないかもしれない。彼女はこう語ったのである。

「私たちドイツ人は、こうした苦しみをヨーロッパへ、世界へと広げたのが私たちの国であったにもかかわらず、私たちに対して和解の手が差しのべられたことを決して忘れません。まだ若いドイツ連邦共和国に対して多くの信頼が寄せられたことは私たちの幸運でした。こうしてのみ、ドイツは国際社会への道を開くことが出来たのです。

日本の周辺には中韓、北朝鮮といった「反日」を事実上の国是としている国があり、70年以上も前のあることないことを持ち出して糾弾する。

メルケルが言いたかったのは、ドイツ周辺にはそういう「反独」の国などないということだ。それが、ドイツ最大の「幸運」だった。

日本が真に和解できるとすれば、中国、北朝鮮の現体制が崩壊し、韓国も反日建国神話から脱却した時だろう。日本の不運はそこにあるという。

いわゆる慰安婦問題がよい例である。かつてナチ組織や国防軍によって女性を慰安婦とする制度があった。それを強制売春と呼ぶが、ドイツ社会ではその問題を完全にタブーとしており、女性が被害に遭ったポーランドなど周辺国も政治問題などにはしない。ポーランド高級紙のある女性論説委員は著者にこう語ったという。「ドイツ人はどんな残虐なことでもしました。ドイツ兵たちは、妊婦を殺す前にお腹を踏みつけ赤ん坊が出てくるかどうか試した。などという記録さえあります。1か月とか1年ではなく、6年もの間毎日毎日、こうした残虐行為が続きました。ポーランド人は、ただ殺されたり強姦されたりしただけではなかったんです。強制売春はドイツ人による迫害のほんの一部に過ぎません」。

メルケル首相の講演は東京・築地の浜離宮朝日ホールで行われたが、慰安婦は「女性の人権の問題だ」と朝日新聞は論点をいつの間にかずらした。それなら、今回、メルケル首相にドイツのケースを糺す絶好の機会を逃したことになる。

2015年9月19日、フランクフルトのモーターショウの宴もたけなわな頃、VW社の排ガス試験の不正が報道され、以来、ドイツでは日本の福島原発事故の時と同じように、爆弾が落ちたような騒ぎになっている。

VWは「ゴルフ」や「ビートル」などの一部のディーゼル車に、米環境保護局（EPA）の検査のときだけ排ガス低減機能を作動させるソフトウェアを搭載し、通常走行時には、基準値の40倍の有害物質を排出していたという。

ドイツ人はこの危機を抜け出すため、ドイツの成功を妬んでドイツを陥れようとするアメリカやドイツの不幸を利用しようとする日本といった敵を捏造し、久々に一致団結するのではないか。リアリズムで常に警戒することが必要である。中韓のように、国内の難問に苦しむ国は、外に敵を持ちたがるものだ。今後、中国とドイツの危険度が増していくことに留意する必要がある。

ドイツにも「夢見る人」ばかりでなく、日本をちゃんと理解している少数の知識人がいる。だから、論理的にもものを考えることが出来るドイツ人は高級紙といわれる「シュピーゲル」や「南ドイツ新聞」は読まない。彼らは「シュピーゲル」など左翼マスコミを嘘つき（プロパガンダばかり）であると見抜いているからである。

著者は、読売新聞ドイツ特派員として14年の経験があり、こうした人々にも積極的にインタビューしており、その取材対象の層の厚みも本書の魅力である。

本書は、ドイツ問題を考える際に、これから必読文献になるだろう。なぜ、ドイツが中国と同様な狂態で日本を批判しがちなのかも、本書を読めば、よく理解できるはずである。

2015.10.15